憑依したけど何か質問ある？

お饅頭

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか博麗　霊夢になっていた主人公。

人間、妖怪、神様などに関わって振り回されながらも彼女は平穏で平和な日常を毎日夢見る。

しかし現実はそんなに甘くなく、主人公なので異変に関わるのは決定事項。彼女から平穏で平和な日常は遠ざかっていくばかり。それでも彼女はいつも通り、ゆるくまったりと生きることはやめません。

一体彼女は平穏で平和な日常を掴み取る事は出来るのでしょうか……？

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 7

プロローグ

憑依。主に霊などが生きている者などに乗り移る現象の事。私こと■■　■■■は、何の因果か別の人の身体に乗り移ってしまったようだ。

そもそも私は生きていたのに、いきなり別の人間になっていたのは憑依と呼んでいいものなのだろうか。それ以外に呼称が思いつかないので私はそう呼んでいるが、誰か正式名称を知っているのなら教えてほしい。

話が逸れた。兎に角、私は寝て起きたら突然、■■　■■■ではなく別の人間になってしまっていた。憑依した人の名前は、博麗　霊夢と言うらしい。中々珍しい名前だと思う。

未だにこの名前で呼ばれても一拍遅れて返事することがたまにある。この姿になって数年経つというのに未だに慣れていない。

だが、そんな摩訶不思議な出来事に遭遇しても、私は『そんなこともあるか』と思ってしまっている。私はこんなに冷淡、というか淡白な人間だっただろうかと自分で自分

を不思議に思ってしまった。
　しかし憑依してしまったものは仕方がないので、私は元の身体の持ち主に謝罪しつつ、この身体で天寿を全うすると決めた。
「はあ……」
　柔らかな日差しの射す縁側に座ってお茶をひと啜りし、ため息を漏らす。なんだかとても年寄りくさいがこの時間が私の至福の時間なのだ。
　この時間だけは誰にも邪魔されたくないし邪魔させない。例えあの白黒の魔女っ子だろうとあやや煩い烏天狗だろうと、誰にもだ。
「はぁい霊夢、ご機嫌いかが?」
「今すぐ回れ右して帰りなさい」
「やん、つれないわね」
　しかしこの邪魔者は予想外だった……いや、予測可能回避不可能と言ったところだろうか。避けられない天災の様なものだ、コイツは。
　今私の目の前で空間を裂いて、その隙間から上半身を出している胡散臭い女性は八雲紫。見た目通り胡散臭いＢＢＡ……とは口が裂けても言えないので女性にしておこう。
　しかし何をしに来たのだろうか。また藍に怒られて飛び出してきたのだろうか。そ

れならコッチも迷惑するので早々にお帰り願いたいのだが。むしろ帰らないならぶん殴ってでも私の視界から消してしまうのもいいかもしれない。
「なんでそんなに敵意剥き出しなのかしら!?」
「黙りなさい。この前の私のお菓子強奪事件、まさか忘れたとは言わせないわよ」
説明しよう。お菓子強奪事件とは、私がとっておきとして厳重に保管しておいた来客用のそれなりにお高いお菓子をあろう事か招かれざる客である紫が私に黙って全て食べてしまった事件の事である。
被疑者はこれに対し、『見つけられるような場所に隠す方が悪いのよオホホホホ』と意味不明な供述をしており、後で藍にこっぴどく叱られたそうだ。
だがしかし私の怒りはまた収まってなどいない。藍は許した、だが私が許すかな!?状態なのだ。
「そ、その件に関しては藍に耳にタコが出来るくらい言われたから許してくれても……」
「でも私に謝罪の一言も無かったわよね？」
私の言葉に紫はハッとした。そうなのだ、このスキマ妖怪は私に対して謝罪の一言も入れてないのだ。今更謝ったところで私が許すわけーー
「……ごめんなさい、霊夢」
「いいわよ」

「……えっ？」

あるのだ。理由としては、もう既に藍からお詫びとして食べたお菓子は返してもらったからである。

私はその時点で許してもいいかなと1ミクロン程思っていたが、藍に謝罪するまで許すなと言われたので許さないと言っていただけ。私はそんなに器量の狭い女性ではないのだ。

「じ、じゃあ今のくだりは？」

「謝罪させるためだけの、言わば茶番ね」

「茶番にしては目が本気だったような気がするのだけれど……」

「そう見えたのならよっぽど私の演技が上手だったのね」

「絶対演技じゃなかった、あの目は本気で私を殺すつもりの目だったわ」

失礼な、そんなことするつもりは毛頭ないわよ。私を誰だと思ってるのかしら全く……聖人君子とは私の為にあるような言葉なのに。

「ごめんなさい霊夢、それだけは無いと断言出来るわ」

「あらそう、なら仕方ないわね。この貰い物のお高い和菓子は私1人だけで頂くとするわ」

食べる為に持ってきておいたお皿に載せた羊羹を紫に見せびらかす。

この羊羹はくれた人曰く人里で一日限定十数個しか作らない代物だそうよ。そんな貴重なモノを食べられないなんて紫は可哀想ね。

「あ、あのー、霊夢？　まさか本当に一人でそれ全部食べるわけじゃないわよね？」

「残念ながら今回は本気よ、いただきます」

爪楊枝で一切れ突き刺し、口に運ぶ。うん、美味しいわね。残念ながら舌が貧乏なせいでちゃんとした感想一つ言えないのが悲しいけれど、それでもとても美味しいということだけは伝えられるわ。羊羹を口に運ぶ手が止まらない。

「……」

「……」

「……」

「……」

見てる、すっごい見てる。仮にも大妖怪とか賢者とか大層な名前で呼ばれてる紫がめっちゃ見てる。普段の面影とか一切ない。欲望に忠実過ぎやしないかしら。

ずーっと見られて居心地が悪いことこの上ないので、仕方なく一切れだけを口元にまで持って行ってあげる。すると餌を待ってた雛みたいにパクっと噛み付いてきた。ナニコレ意外と面白い。

「でも一切れだけよ」

まあ、あくまで私が貰ったものだからあげる義理は無いわけで。
本当に一切れだけあげて残りは私一人で食べようと、パクパク口に運んでいると段々と紫の表情が曇っていく。アンタどれだけ気に入ったのよこの羊羹……
「はあ……仕方ないわね。お茶のお代わり入れてくれたらあげるわ」
「直ぐ行ってくるわね」
ダッ、と駆け足で私の湯飲みを持って台所へと走って行ってしまった。紫はどうやら大妖怪や賢者としてのプライドは既に犬にでも食わせてしまったようだ。今の姿を藍に見せたらどうなるだろうか。
そんな事を思いつつ私はまた羊羹を一切れ口に運ぶ。これが私の日常である。平凡に、平和に生きたいのにどうしてこうも私の周りは、こんなにも騒がしいのだろうか。

第一話

突然だが、夏はお好きだろうか？　私は嫌いだ。春から夏に移り変わる時期になるだけでも憂鬱になる。

どうして私が夏が嫌いか、その理由としては、ムシムシするし汗かいてベタベタするし暑苦しいからである。何故夏なんてあるんだと思うまでもある。

何故こんな話をしたかと言うと、私が今住んでいる幻想郷も夏へと季節が移り変わろうとしているからだ。ああ、ヒンヤリ冷たい場所で夏が終わるまで避暑していたい。むしろ夏すっ飛ばして秋になってもらいたい。

「れいむ―！」

そして私の下には、夏と同じくめんどくさいのが現れた。

白と黒を基調とした魔女っ子スタイルな女の子、霧雨　魔理沙が箒に跨り、猛スピードで神社の境内に突っ込んできた。正直受け止める気すら一切起きないのでそのまま放置する。

ズガンと境内に直撃し、砂煙が巻き起こって視界を遮る。しかしそれでも私はのんびりと茶を啜り続ける。

何故そうも冷静で居られるのか、だって？　週3のペースでこんな事が起こってたらそりゃ慣れもするわよ。最初の方は私も内心本気で焦ってギリギリのところで受け止めはしてたけど1回ミスって落下させてもめっちゃピンピンしてたからそこから放置し始めたのよ。

あれはギャグ補正だとかそんなチャチなものじゃ断じてないわ。

「いてて……」

いやいてて、じゃないわよ。明らかにそんな服が多少汚れる程度で済む速度じゃなかったでしょう？　毎回これを間近で見ているけど未だに納得いかないわよ。

「相変わらずのド派手な登場ね魔理沙、お帰りはあちらよ」

「のっけから酷い！」

私が境内の入口を指差すと、なんでそんな事言うんだと抗議しながら私の居る場所までツカツカと歩いてくる。お帰りはあちらよって言ったのになんてコッチに来るのかしら。天邪鬼なのか、はたまたそういうお年頃かしら。

「折角遊びに来たのにそんな対応はないぜ」

「誰が遊びに来て欲しいって言ったのかし……らっ」

「いってえ!?」

さり気なく私のおやつである水饅頭に手を伸ばす魔理沙の手を叩き落とす。しれっ

と人の物取ろうとしないで頂戴。

しかし一度叩き落とされてもめげずに何度も再チャレンジしてくるので、私と魔理沙の水饅頭を賭けた謎の攻防が始まってしまった。

「少ししつこくないかしら」

「だったら諦めて……一つくれよ！」

「誰があげるものですか」

うがーっと奇声を発しながら飛び付いてこようとするので、近くに置いておいたたまぐしを素早く喉元に突き付けて動けないようにする。チェックメイトね。

「れ、霊夢さん？　あの、それは流石にやりすぎじゃないかなー……って思うんだけど」

「何言ってんの、アンタが止まらないから力技で無理やり止めたんじゃない。素直に止まっておけばここまでしないわ」

突きつけたたまぐしを降ろし、再度縁側に座ってお茶を啜る。そんな私に対し、魔理沙は何かを思い出したかのようにポンと両手を合わせて下げていた鞄からキノコを取り出した。

どこからどう見ても怪しい類のキノコである。発光色で目立つ色のキノコは大体毒あるとこの前きっちりと説明しておいた筈なのだが、何故懲りずに持ってくるのだろうか。説明を右から左へと聞き流していたと言うのなら、今度は徹底的に頭の中に叩き込

む所存だが。
「……何でまた同じ過ちを繰り返そうとするのかしら。アンタの頭には餡子でも詰まってるの？」
「ひでぇ!?」
　よもや忘れたとは言わせない。何で私まで食したのかが未だに自分でも疑問に思うくらいの毒々しい色のキノコを食べて起きてしまった悲惨な事故の事を。事故だけに自己責任とは言わせない。
「こ、今度のは絶対いけるって！」
「アンタの絶対はこの世で上位に食いこむくらい信用ならないのよ」
「大丈夫だって！」
「ちょ、押し付けてこないで」
　グリグリとキノコを私に押し付けてくるのを本気で止めて欲しい。
「あやややや……何かしてると思ったら」
「げっ」
　夏と同じくめんどくさいのその2が現れた。私の日頃の行いは悪くない筈なのに、どうして今日はこうも来て欲しくないのが立て続けにやってくるのか。日頃の行いなのか。

両手に扇とカメラを持ち、何かネタはありませんかと期待するような目を私に向けるコイツの名前は射命丸　文。新聞記者だそうだ。まあ私にとってはどうでもいいが。

「……何の用よ文。ネタならないからさっさと帰りなさい」
「いや今さっきの貴女達ならネタに出来るかと……あっ、ちょっと、その見るからに毒ありそうなキノコ近づけないで下さい霊夢さん」
「大丈夫よ死にゃしないわ。この前食べたのと同じようなキノコだから大丈夫よ」
「なんでこんな毒々しいキノコ食べようと思ったんですか」
「一時の気の迷いよ、ほらぐいっといっちゃいなさい」
「いやいやいや、こんなどこからどう見ても怪しいキノコ食べるわけないじゃないですか。せめて安全性を確かめてからにしてくださいよ」
「それもそうね」
　というわけでキノコを持ってきた張本人こと魔理沙に食べてもらうことに。尚これ一個しか持ってきてないみたいだから必然的に魔理沙1人が生贄になるわね。
「というわけで魔理沙、まずアンタが食べて確かめてからにして頂戴」
「え、えぇ!?」
　その反応はおかしい。人に食べろと押し付けて来ておいてその反応は絶対におかし

い。

　文に押し付けようとしていたキノコを魔理沙に食べさせようと近づけると、無駄に機敏な動きで私から距離を取って片足立ちで威嚇してくる。あれは荒ぶる鷹のポーズだ。始めて見たわ本気でやってる人。

「嫌だ！　私は絶対食べないぞ！」

「そう……仕方ないわね」

「あ、諦めてくれるのか？」

「そうね……文、ゴー」

「アラホラサッサー！」

「え〟」

　仕方がないので実力行使だ。文にゴーサインを出すと嬉嬉として天狗としてのスピードを生かして魔理沙の背後に回り込み、羽交い締めに。逃げようとジタバタ跪く様は遊○王のワンシーンを彷彿とさせる。

　しかし今回バー○ーカーソ○ルを使用しているのはコチラだ。キミが泣くまでキノコを口に運ぶのを止めない。泣いても止めない。

「ちょ……霊夢……霊夢さん、止めーー」

　雲一つない青空の下で、魔理沙の悲鳴が周囲に轟いた。

この後泡を吹いて倒れた魔理沙を介護したのだが、それはまた別のお話だ。今回は高笑いが長時間辺りに響いただけで済んだので御の字だろう。